

目次

現うつつぐるま車

後篇（一章～第三十三章）

1

『現車』のこと／渡辺京二 402

福島次郎略歴 405

姉（山内菊子）、私（泰三）、弟（信正）、妹（高子）の四人兄弟は、夫々に父親が異なる。母（民江）は、高子の父親にあたる興行師の曳地省吾を愛しながらも、又遊び人の妻の苦労が身に沁み、娘にだけは同じ轍を踏ませまいとする。が、姉はそれを振り切つて、初恋の相手・野田鉄雄（曳地の子分）のいる天草へ走る。祖父（鶴松）の営む明十橋きわの旅館は、姉が去つたあと、祖父の権妻である松代が亡き祖母の座について、これも同じく祖父の手ついている宮子などを混えた女中達を従えている。その旅館の離れの地下室で、祖父の妹のモトおばさんを母がわりとして育つ私は、中学三年になっている。すでに太平洋戦争も末期の頃である。

第一章

1

祖父の意に背き、姉が、鉄雄のいる天草へ走ったのは、昭和十七年の秋であった。

当時、天草には小さな無煙炭坑がいたるところにあり、和久登炭坑も、その中の一つであった。坑夫数百五十人といえ、島に散在する二十余りの炭坑の内では、中位どころであろうか。熊本に背を向けた西海岸の、それも山頂に近い地点にあった。で、本渡からならば、天草島を西へと、山越えの横断をするか、海岸添いにバスで富岡の方へ迂回して西海岸へ出、都呂々から東へ四料の山道を入ってゆくかの、いずれかだった。和久登への入口になる都呂々村は、富岡と下田の中間にあたる。

労務課主任の佐久間さんの配下に鉄雄が入る事が出来たのも、鳥崎町の藤田の口ききがあったからである。物の困

窮の日々激しくなつてゆく時、給料の外に住宅も与えられ、米や酒や砂糖の特別配給もあるといった境遇はすでに二十九歳になった彼にとつても悪い条件ではない。

それに、おべんちゃらやら、細かな計算などの必要が全くない、唯体ごとの気合でもって押していけばいい、坑夫取り締り役は、何よりも鉄雄の気性に合っていた。寡黙無表情の底に、坑夫らを黙らせる気性の激しさを持っていた鉄雄は、主任のお気に入りだった。鉄雄は、温順な坑夫や、又よく人から騙される浅知恵の坑夫に対しては、思いやりを示すが、自分に歯向かってくるような坑夫に対しては、過熱しやすいそのやくざ上りの性をむきだしにした。

世を拗ねた者や、流れ者も混る小炭坑の坑夫達の事とて、気が向かねば入坑しようとしなない。そこを坑口まで連れてゆく役目を鉄雄はしていた。夜明けにおきて、坑夫の家々の戸を叩き、独身寮の者達をおこして歩く。勢揃いしたところで体操をさせ、それから入坑させる。体操は鉄雄が軍隊でおぼえてきたものだった。

二月に一度は出張した。博多の工夫斡旋所まで行って、新しい坑夫を連れてくるのである。借金で身動きの出来ぬ男を身代を払って連れて来たりする時は、途中で逃げられないようにしなければならぬ。その前払金は、又次の炭坑で働いて返していかねばならぬその男の新しい借金とな

る。悪循環の地獄のようなものである。この地獄から、坑夫が逃亡する事もしばしばある。が、島を離れる迄は大抵捕えられた。逃亡の報が伝わると、労務課の者は、手分して、島内の炭坑を探して歩く。炭坑主同志の連絡がとれていて、話し合いで、その坑夫全員の首実検をさせて貰い、強引に連れもどしてくる。当時までの坑夫の身の上は、二本木の女郎の境涯と少しも変わらないのである。が、「地獄の使者」をせねばならない鉄雄であったが、食糧や衣類の配給の時、他の労務課の者がよくやつていたピンハネを一切しないという点や、弱者を庇うという性格などから、坑夫らの信望はふしぎとあった。

坑夫達も、土地の人々も姉には親切だった。ことに土地の農家の人々は「熊本の奥さん」とよび、いたわる風（ふう）にみえた。姉が米や野菜を買いにゆくと、気の毒なほどまけて呉れた。緋（ひ）のモンペに長靴を履いて、買い出しや、水くみ、薪拾いにゆく姿の馴れないのを見て、姉の以前の生活を推察し、痛々しく思ったのかもしれない。が、人眼はとにかく、姉自身としては何ほどの事もなかった。鉄雄が属する環境に己れを馴らすために、唯懸命だった。

姉が最も困ったのは、火熾（む）しだった。鉄雄と一緒に朝の四時に起きながら、鉄雄が一仕事して帰宅しても、姉の手許の炭火はおきてない事もあった。一旦火がついてもおそ

ろしく弾き、自ら弾き消えてしまうその木炭は、町に売りに来る炭とは違うような気がした。水は、桶を長い柄（え）の先につけて井戸からくみあげるものなので、バケツ一杯くむのにも苦勞した。拾った薪のまとめ方もわからない。それを——山中で売る炭は先ず選択が大切だとか、寄せた薪は先ずかずらで一卷きし、それを軽く足で踏みつけていくと丸く締（ぢ）めてくる、これを棒の前後にさして棒でかつぐとよいとか——これらはみな、土地の娘達が親切に教えて呉れた事だ。アセチレンを庭の隅（すみ）においていたら、翌日はその塊りは消えて、白い泡のたつ液（た）になっていた。アセチレンを貰（か）ったら、必ずブリキ缶（か）に入れておき、農家に買い出しにいく時に持つて行くと、野菜も米も只（ただ）で貰（か）えるという、坑夫の妻の暮（く）しの知恵もあとでわかった。炭坑以外は電気のない村落なのである。その他、ストーブのたきつけ方、むらさきだけの干し方、山芋の探し方等、これらは、あの明十橋（めいじゅうはし）の旅館の本棚に、姉がならべていた、主婦の友社発刊の全十八巻「花嫁講座」のどこにも書いてない事柄だった。講座の本に書いてあった通り、忠実に「美容」に専念していた姉の、その手も、主任の奥さんをして「それみたら、きつと熊本のお母さんが泣かれるわ」と眩（くら）やかせるほど、炭水に荒れてしまっていた。が、それにしても、山間特有のきびしい冬が、あの病弱だった姉の上を、二度も通

過して行っても、風邪一つひかず、疲労も感ぜずにごし
てしまった事は、ふしぎであった。

十日に一度は、山を下りて、富岡まで買物に行つた。帰
りは、都呂々から炭坑のトラックの上に乗せて貰う。
石炭屑の上にモンペの膝を崩したまま、いつの間にか朝起
きの寝不足を償^{つぐな}つてゐる自分に気づく時もあった。上へい
くに從つて、空気が澄んでくるのがわかる。姉にとつて、
鉄雄のいる山頂が、故郷であつた。明十橋が恋しいと思つ
た事は一度もない。祖母のすでに亡^ない熊本は、何の意味も
なかつた。

和久登からは、熊本の方角は、山にさえぎられてみえな
い。北は、長崎だつた。晴れた日には、山と山とのほさま
から、紫にかすむ長崎の島が、海の彼方に望まれた。まだ
熊本県から出た事のない姉は、その気宇大な眺望を、家の
庭先から夢のようにみやるのだつた。

鉄雄に連れられて、下田の温泉へ行つたのは、十九年の
夏であつた。妙見ヶ浦まで足をのばし、そこで漁師の舟に
のつた。姉は、海と言へば、長浜海水浴場の内海しか知ら
ない。だから、この外海の鮮やかな碧さにおどろき、遠く
まで舟を出すことをこわがた。この折、捕れたばかりの
雲丹^{うに}をみた。針をもつた奇体な塊り。旅館でよく中食^{なかじよく}に添
えて使つていたものの正体がこれであつたかと眺めながら、

ふと祖父の事が偲^{しの}ばれ、自分が現在いかにしあわせでいる
かという事を、熊本の祖父にわかつて貰いたい気持ちに駆ら
れるのだつた。姉は懐妊^{くわにん}していた。

姉に子供が生れたのは、二十年の一月である。この時、
母は始めて、出奔した娘のところへいく決心をした。祖父
に隠れて物を送るのは常だつたが、逢うのは三年振りであ
つた。木炭節約のためのバス制限で、乗るのにも切符がい
り、本渡まで行けても、そのさきどうなるかわからなかつ
たが、母は、宮子と四歳になつた高子とを連れて、かまわ
ず発^たつた。本渡でやつとバスの切符が一枚手に入つたので、
チビの宮子は子供に擬^まして乗せた。母はバスの中で「宮し
ゃん、こもなつとかんかい、こもなつとかんかい」と、し
きりと叱つた。宮子は「これ以上、縮まらりゅうかい」と
いいながら、泣きとも笑いともつかぬ顔で、後部のシート
の蔭に身をひそませて乗つていつた。天草は二十年ぶりと
いう、大雪の年だつた。都呂々村の店の人達は、母達が雪
の一尺以上も積んだままの山道へ踏み入ろうとしているの
を知つて、口をきわめて止めようとした。

「途^とつけむも無^なや。土地の者でん行かんのば、町の人
の！」

母はかまわず登つた。高子を背負い、不安がる宮子を

喧嘩ごしで励まして。

途中、高子の片方の靴がぬけて路より一段と下ったところへ落ちた、すぐ眼の前の雪の上である。高子は取って欲しいとむずがった。が、母はそのまま打捨てて上へ進んだ。路でないところへ踏みだせば、どんな深みにおちこむか限らぬと恐れたからである。

が、出産後、姉のために卵を農家へ買い出しに一人で出掛けた時は、道なき道の雪ばかりの上へ体を横たえて、――母の口表現を借りれば「チュチュウーと」――滑って行った。段畠の重なるずっと下の方に、屋根ばかり見えている農家へ、いち早く行きつくには、横に肥って、腰と尻の頑丈な母の体としては、それが一番いい方法であったから。頭から雪だらけになっても、ちっとも寒くはなかった。姉の子は、男の子であった。

2

明十橋の銅鉄の飾り枠が取りはずされたと思つた時には、新市街記念碑の軍人像もなくなつていた。

町のあらゆる金具銅鉄類は軍用に次々と徴収されて行つた。がそんな頃は、まだ戦局に希望があつたので、無残

にこわし取り去つた跡をみても、みじめな感じは少しもなかった。国民はまだ遠くで勇壮な軍歌の合唱を聞く想いがしていた。

が、それも、空襲の際の延焼を最小限に喰いとめるための家屋強制疎開が方々に行われたす時分になると、何ともいえぬ心もとない白々しさ、そのひきとき跡の壁砂が口でできしきしなつてるかのような不吉さを感じざるを得ないのだった。羽根をむしり去つた鶏のように家を裸にし、その中心の柱に荒縄かけて、砂煙りと共にどつと引き倒す光景が、熊本市中にも見られたしたのは、二十年の春からである。

市中に初めて爆弾が落ちたのが四月。健軍の工場を襲つたものの中の一機が、市中に紛れ込み、燕の糞のように落ちて去つた気まぐれの一発。それは唐人町の小間物屋に命中した。怪我人はなかったが、全壊した家屋の下の防空壕から引き出された親子三人の顔色は死人と同じ。が、野次馬の顔色にも、火事場をみるのとは違う、何かどす黒い不安の色がよどんではいた。

しかし、熊本はまだまだ呑気な方だった、爆弾一発で人が蟻のように集つて来たのだから。方々の都会が次々に焼土と化しているのはわかつていても、わが身にかかる火の粉でなくては、実感が薄い。「空襲警報」とあつて、勇

『現車』のこと

渡辺京二

『現車』^{うつくるま}をはじめて読んだのは、もう十年以上も前のことである。当時私は東京から引揚げて来たばかりで、以前暮っていたときには何の関心も持てなかった熊本という街のふるい伝統的な部分に、自分でもおかしいほどの興味を覚えはじめていた。いわばそれは私の熊本再発見で、堀ごしに重たげな椿の花弁が顔をさし出しているかつての土族町や、坪井川が幾重にも折りたたむあたりに、澱^{わづ}がたまるとうに寄り集まった船場界隈の町筋を、飽きもせず歩き廻ったものである。

『現車』を古本屋で見つけたのは、そんな或る日のことだった。作中に描かれている明治、大正の古い熊本の姿がまづ珍しかった。塩屋町を中心に、唐人町、新町、新鳥町、練兵町といった、古典的な熊本の下町が舞台となっているのも心の弾むことだった。私は母が古城堀端の生まれのせいか、一度もそこに住んだことはないのに、このふるい下町の一帯に、心ひかれるものかねて感じていたのである。だが、この小説が私のなかに、新鮮なおどろきを呼び起

こしたのは、単にそういう背景や風俗の、懐古的なおもしろさのためではなかった。この作品が描いているのは、何よりもまず、熊本の庶民の魂であった。熊本を舞台にした小説や戯曲は少なくはない。熊本に住み、熊本という地域を背景にした作品を書いている人たちの数も、おなじく決して少ないわけではない。だが、肥後の庶民たちの独自の魂のありかたは、この『現車』の作者によつてはじめて描かれた、そう私は感じた。

福島次郎さんは、当時八代工業高校の先生をしておられた。福島さんをはじめて八代に訪^とうた晩の印象は、今でも昨日のことのように鮮やかである。この人は私と同年の昭和五年生まれで、その頃は三十五、六歳だったはずだが、私には紅顔の美少年、といったふうに感じられた。私はまた、『現車』のヒロイン民江姐さんのモデルであるという、福島さんのお母さんにもお会い出来た。そのときお母さんから聞かせていただいた、熊本の下町の住人にまつわるいろいろなエピソードもまた、大変に興味深いものであった。

福島次郎略歴

一九三〇年、熊本市生まれ。

一九五三年、東洋大学国文科卒業後、八代工業高校に赴任、その後、国語教師として熊本県内の公立高校に勤務。

一九五七年、「阿武隈の霜」で第八回九州文学賞受賞。

一九六一年、「現車」(日本談義社)で第三回熊日文学賞受賞。

一九六四年、「現車」を『日本談義』(日本談義社)二月号より、

六六年十二月号まで連載(三十三回)

一九八七年、教職を退く。以後、執筆活動に専念。

一九九六年、「バスタオル」を『詩と眞實』二月号に発表、

『文學界』六月号に転載。第一一五回芥川賞候補になる。

同作品で第二五回詩と眞實賞受賞。

一九九八年、三島由紀夫とのかかわりを描いた小説『三島由紀

夫——剣と寒紅』(文藝春秋)刊行。三島の未公開の手紙

を無断掲載したとする遺族の提訴で出版差し止めとなる。

一九九八年、「蝶のかたみ」を『文學界』十一月号に発表。第

一二〇回芥川賞候補になる。『蝶のかたみ』(文藝春秋)

刊行。

一九九九年、「奇腹讀」を『詩と眞實』六月号に、「華燭」を

『文學界』七月号に発表。

二〇〇〇年、「霜月紅」を『文學界』三月号に発表。

二〇〇一年、「淫月」を『文學界』九月号に発表。

二〇〇三年、「缶爛酒」を『詩と眞實』八月号に発表。九月より自伝的小説「いつまで草」を『熊本日日新聞』に連載

(二〇〇五年一月まで、四〇八回)

二〇〇四年、「三島由紀夫の心、その深奥——全書簡を読む」

を『文學界』五月号に発表。

二〇〇五年、「花ものがたり」(熊本市現代美術館)、『淫月』

(宝島社)刊行。四月より「花のかおり」を『熊本日日新

聞』に連載(四五回)

二〇〇六年二月二二日、死去。享年七六。

二〇〇六年八月、『華燭』(海鳥社)刊行。

うつく^{るま}
現 車 後篇

2017年4月20日 初版第1刷印刷

2017年4月25日 初版第1刷発行

著 者 福 島 次 郎

発行人 森 下 紀 夫

発行所 論 創 社

東京都千代田区神田神保町 2-23 北井ビル

tel. 03 (3264) 5254 fax. 03 (3264) 5232 web. <http://www.ronso.co.jp/>

振替口座 00160-1-155266

装幀／宗利淳一＋田中奈緒子

企画・編集／宮下和夫

印刷・製本／中央精版印刷 組版／フレックスアート

ISBN978-4-8460-1581-7 ©2017 printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。